

今年の鶏卵卸値が戦後最低となることが確定した。指標となる全国農業協同組合連合会（全農）の東京のMサイズの加重平均価格は年間最終取引の二十六日、一キログラム百五十五円。この結果、今年の平均価格は一キログラム百五十一円と、農業団体が統計を取り始めた一九五四年以来の最安値となった。

## 鶏卵卸値、戦後最低に

### 生産者の安値競争激化

低迷の理由の一つは大規模生産者が増加したこと。関東でも百万羽の鶏を飼う養鶏場が昨年から今年にかけ本格稼働し、生産者の安値競争が強まった。暖冬でおでんなど鍋物需要が盛り上がり、スーパーが鶏卵を上げる、スーパーが鶏卵の特売を減らしたことも卸値低迷に結び付いた。

今回の安値に対応して、農水省は一九八一年から継続してきた鶏卵の計画生産制度を二〇〇四年度から廃止する方針。従来は目標数量を生産者ごとに細かく定めていたが、実績が正しく報告されず生産計画と実際の需要に大きな差が出ることも多かった。農水省は「生産者が自ら需給調整して卸値の安定を目指す仕組みを作りたい」（食肉鶏卵課）としている。